

## もうひとつの世界・もうひとりの私

——ソラリス、銀河鉄道、世界の終り

森岡正博

いまここにひとつの世界があつて、私は、この私ともうひとりの私とに分離する。もうひとりの私は、やがてもうひとつの世界へと旅立ってゆき、この私はこの世界の中にひとり取り残される。この私も、しかしいずれは、この世界を離れ、もうひとつの世界へと呑み込まれてゆくのだろうか。

### ソラリス

地球をはるか離れた赤と青の二重星のまわりを回る惑星ソラリス。スタニスワフ・レムの作品『ソラリス』は、この奇妙な惑星の上空に静止する観測ステーションに私が到着するところからはじまる。ソラリスは、ゼリー状のソラリスの海で覆われている。ソラリスの海は、高度の知性と能力とをもっている。ソラリスの海は、観測ステーションにいる人間たちの心の奥底を読み、彼らの内面の深層に

ある過去の傷を、実体化してステーションに送り込む。

私の前には、十年前自殺した妻があらわれる。私は、妻を死に追いやった心の傷をかみしめながら、遠く地球を離れた異星の地で、いまでも愛する妻と接吻をし、愛撫を繰り返す。ソラリスの海によって私の記憶通りに作り出された人間は、もはや幻影でも複製でもない。それは私の歴史と内面とに深く結びついて存在する、ひとりの生身の人間に他ならない。そして、その人間は、私の記憶から生まれ出たという意味においては、私自身の分身、すなわちもうひとりの私と言えるのかもしれない。

私はソラリスとの知的格闘のあと、ソラリスの海に出現した島にヘリコプターで降りてゆく。私は島の波打ち際に歩み寄って、海に向かって手を差し伸べる。波はゼリー状に触手をのびして「私の手に触れないように、薄い空気層を残して、まるで手袋のように私

の手をつつんだ」。そして短いコンタクトのあと、波は名残り惜し  
そうに海へと戻る。

宇宙ステーションの中のもうひとりの私とならば、私は肌と肌で  
愛撫し合うこともできる。しかし、ソラリスの海に、私は直接触れ  
ることさえできない。人類の英知をすべて投入しても解明できない  
ソラリスの海は、私にとって、完全な他者だ。私と他者は、薄い空  
気の層一枚をはさんで、お互いを探り合うのみである。

タルコフスキーの映画『ソラリス』は、このラストシーンを、独  
自の解釈で変容させている。ソラリスの海は、島の上に、私の生ま  
れ育った東欧の森の中の一軒家をそのままそっくり復元させる。家  
の外には森が広がり、川には雪解け水が流れ、家の中では懐かしい  
家具や本が、そして家族が私をあたたく迎え入れる。青く光り輝  
くソラリスの海のただ中に浮かぶ、この追憶の小宇宙に抱きとられ  
て、私は二度と地球にはかえらず、この場所で生きてゆくであろう  
ことが暗示される。

この小宇宙には他者のにおいが無い。他者の見えない小宇宙では  
じめて、私はこころの平安と救済とを得ることができる。そしてこ  
の閉じた私の小宇宙を背後で維持し支えているものこそ、私にとっ  
て完全な他者であり続けるソラリスの海にはかならない。

タルコフスキーの映画のラストシーンには、もうひとつの意外な  
解釈が可能だと思う。レムの原作では、ソラリスの海が用意した島

に、私がヘリコプターで降りて行く。しかし、タルコフスキーの映  
画では、この降下シーンが映されていない。

ソラリスの海は、島の上に、なつかしい森や川や家と同時に、そ  
こに住むべき私をもまた作り出したのだ。ソラリスの海の中に作り  
出されたもうひとりの私。ステーションにいた私がどうなったのか、  
この映画は語らない。そのかわり、ソラリスの海によって作り出さ  
れたもうひとりの私は、島というもうひとつの世界の中で、追憶と  
ともに生き続けてゆくことを決心する。

ソラリスの海という装置を媒介として、この世界にいるこの私と、  
もうひとつの世界のもうひとりの私とが、一瞬交わり、永遠に隔離  
される。島に住むもうひとりの私に、死は訪れるのだろうか。もう  
ひとりの私が死ぬとき、もうひとりの私は、自分が再生するかもしれ  
ないさらにもうひとつの世界を夢見るのだろうか。

世界が、この世界とは別の場所になると創造されるとき、その  
新しい世界とこの世界との間に、本物とそのコピーという区別は成  
り立たない。パラレルワールドではどの個別世界も本物の世界とな  
る。パラレルワールドには、それぞれ異なった私がいるかもしれない。  
しかしそれらの私は、どれもが本物の私である。ただ、それら  
の私のうち、どれかひとつの私がこの私として同定される。残りの  
私（たち）は、この私とは永遠に隔離されたまま、もうひとりの私  
としてそれぞれの宇宙を浮遊する。

## 銀河鉄道

この世界と、もうひとつの世界。そしてその二つの世界をつなぐ通路。この私と、もうひとりの私が、その通路を通じて旅をする。ひとりともうひとつの世界へと消えてゆき、もうひとりはこの世界へと戻ってくる。

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』は、午後の授業から始まる。先生が銀河の図を指して、「川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いもの」は何かとみんなに問い掛ける。そして空の星たちはみんな「乳のなかにまるで細かにうかんである脂油の球にもあたるのです」と説明する。

この地球をも含めた無数の星が、銀河という大きな白い乳の流れのなかに浮かんでいる。人間は、乳の海に浮かぶ小さな存在にすぎない。しかも人間は、その乳の流れを、澄み切った夜空のはるか遠くにしか眺め見ることができない。この世界にいたのでは決して手の届かないもの、遠くから眺めることしかできないものによって、この世界のすべてが存在論的に基礎付けられている。この感覚が『銀河鉄道の夜』の底流にある。

ジョバンニは学校の帰りに、活版所で小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を一心に拾う。そしてそのあとで時計屋に飾っている星座の図にここをうばわれて「あゝ、ぼくはその中をどこまで

も歩いて見たい」と夢想する。この極微の世界への集中と、極大の世界への自己解放は、現実のこの世界から遊離しようとする同じところの傾向性だ。

ジョバンニは家に帰って、病氣のおっかさんのための牛乳をもらいに外へ出る。ところが牛乳屋には牛乳がない。ジョバンニはしかたなく丘に登って夜空を眺める。そしていつのまにか銀河鉄道に乗っている。そこには親友のカムバネルラがいる。二人で銀河の旅をしたあと、ジョバンニはふたたび丘の上に戻る。ジョバンニは牛乳屋で牛乳をもらって、おっかさんの所へ急ぐ。その途中、カムバネルラが川で溺れて死んでいたことを知る。ジョバンニは牛乳を持ってきたまま、もういちもくさんに河原を町の方へ走る。

銀河鉄道の夜とは、おっかさんのために乳をもらいに行ったジョバンニが、乳そのものである銀河のなかを旅して、おっかさんに乳をはこんでくる物語である。

この世界と、それを包み込みそれを基礎付けているもうひとつの世界。一方の世界には病氣のおっかさんがいて、もう一方の世界は母そのものの象徴である乳の流れとして存在する。その二つの世界を、銀河鉄道が結びつける。銀河鉄道はこの二つの世界の間を、無限に循環運動している。この世界ともうひとつの世界とをつなぐ媒介項が、鉄道という循環的な「旅」のイメージでとらえられていることに注目しよう。この世界の死者は、銀河鉄道に乗ってもうひと

つの世界へと旅立ってゆく。カムパネルラはもうひとつの世界へと吸い込まれる。しかし、ジョバンニは乳をたずさえてこの世界に戻ってくる。ひとり行ってしまう、もうひとは戻ってくる。

ジョバンニとカムパネルラは終始共振しあっている。ジョバンニが学校で先生の質問に答えられなくて真っ赤になっているとき、カムパネルラはその解答を知っているのに、ジョバンニのためを思っでじっと黙っていた。同級生がジョバンニのこころを傷つけたとき、その同級生の輪のなかにいたカムパネルラは、気の毒そうにだまっで少しわらって、おこらないだろうかというようにジョバンニの方を見ていた。銀河鉄道の中で、ジョバンニがカムパネルラに話しかけようと思ったちょうどそのとき、ジョバンニのこころの中の問いかけに答えてカムパネルラは口を開いた。あるいは途中で乗ってきた女の子とカムパネルラが楽しそうに話をしているのを見て、ジョバンニはつらくなって、目が涙でいっぱいになった。

この物語世界の中では、カムパネルラは、ジョバンニの分身であると考えられないだろうか。ジョバンニという人格がもつ様々な潜在的可能性のなかから、ある種の側面を抽出してきて、それらを実体化したものがカムパネルラというもうひとつの存在ではないだろうか。

カムパネルラとは、ジョバンニという可能性の中から、死んでゆくべき側面を凝縮したひとつの架空の抽象物である。死んでゆくべ

き分身が死んでいったあと、私はひとりこの世界に残される。

銀河鉄道に乗った直後にカムパネルラはジョバンニに向かって言う。「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」カムパネルラは、もうひとつの世界へと入っていく直前に、窓の外の野原を指差して言う。「あゝ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集ってねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにあるのぼくのお母さんだよ。」おっかさんへの旅という点で、ジョバンニとカムパネルラの旅の目標は一致する。私とその分身は、目標を共有する。ただ、カムパネルラがもうひとつの世界におっかさんを見出したのに対し、ジョバンニはこの世界で病んでいるおっかさんのもとへと戻ってくる。乳をたずさえて。ジョバンニにとって乳とは何か。

銀河鉄道に乗ったカムパネルラは、死すべき人間であり、おっかさんのもとへ旅する人間であり、そして「幸い」を追い求める人間である。カムパネルラは言う。「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」そして、「ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだ」と語る。

カムパネルラは、おっかさんの幸福を追い求める。いいことをするという道徳性が、幸福の獲得と結び付けられる。カムパネルラは、ジョバンニの、死すべき分身であった。その死すべき分身が、死への鉄道に乗ったとき、その分身はおっかさんの、そして他人の幸福

を追ひ求める求道者となる。死すべき運命の自覺が、利他的な道徳性を呼び起こしてゆくというダイナミズム。

カムバネルラの道徳性は、旅が進むにつれて、ジョバンニへとフ  
ードバックされてゆく。ジョバンニは、見ず知らずの鳥捕りを氣  
の毒に思い、彼のほんとうの幸せになるなら、自分が天の川に立つ  
て百年続けて鳥をとってやってもいい、と思う。しかし同時に、  
「僕はあの人が邪魔なやうな氣がしたんだ。だから僕は太へんつら  
い」と独白する。ジョバンニの中で、利他傾向とエゴイズムが交錯  
する。ジョバンニは道徳性の原点にいる。ジョバンニはまた、北の  
はての海で一生けんめいはたらいっている人のことを想像し、「ぼく  
はそのひとにほんたうに氣の毒でそしてすまないやうな氣がする。  
ぼくはそのひとのさいはひのためにいつたいどうしたらいいのだら  
う」とつぶやく。カムバネルラの文脈では、幸福にしてあげる対象  
はまだおっかさんだけであった。ところが、ジョバンニのころの  
中では、その対象が、隣の鳥捕りから、北のはての海にいる人にま  
で、急激に拡大してゆく。カムバネルラではまだ家族共同体的な枠  
に縛られていた道徳性が、ジョバンニの想像力によって、すべての  
人々へと拡張される。

乗り合わせた女の子から、自分の命を捨ててみんなの幸いのためになることを願ったさそりの話を聞いて、ジョバンニは言う。「僕はまだもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のはもうあつた。」

からだなんか、百べん灼いてもかまはない。」「けれどもほんたうの  
さいはひは一体何だらう。」「ジョバンニはカムパネルラに向かつて  
言う。「僕たちしつかりやらうねえ。」「ジョバンニの道徳性は、自己  
犠牲を含むものへのぼりつめる。みんなの幸福のためならば、自  
分の命を犠牲にしたってかまわない。カムパネルラという分身を経  
由してジョバンニにフィードバックされた道徳性は、乳の流れの中  
を旅する間に、自分の命をも捨てる自己犠牲へとたかまつてゆく。

しかしこのたかまった自己犠牲のエートスは、目的を持たない。自己犠牲が奉仕するところの幸福とはなにか、具体的に何をする事が幸福へとつながるのか、ジョバンニもカムパネルラも知らない。

銀河鉄道は、空に開いたまっくらな穴へと近づく。ジョバンニは「みんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」ことを誓う。カムパネルラは窓の外の野原を指さして「あすこにあるのぼくのお母さんだよ」と叫ぶ。そしてカムパネルラは消滅する。カムパネルラはお母さんをおみ追ひ求め、お母さんのもとへと帰って行く。カムパネルラにとってのお母さんとは、家族共同体の文脈における母であり、かつ同時にカムパネルラ個人を包み込み天上へと引き上げる、カムパネルラひとりのための救済神である。ジョバンニにとつてのおつかさんとは、地上で病んでいる弱い母であり、ジョバンニが助け援助しなければならぬ生身の人間であり、ジョバンニが自己犠牲によって幸福を分け与えるべき地上の多くの人間たちの象徴であ

る。ジョバンニの自己犠牲のまなざしは、「みんな」に向けられている。それらみんなは、地上で、おっかさんのように、牛乳という幸福と救済とを待ち望んでいるのだらう。

ジョバンニはブルカニロ博士の助言を得て言う。「あゝマジエラの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。」博士はそれを聞いて言う。「さあ、切符をしっかり持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに、本当の世界の火やげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。」

カムパネルラはおっかさんひとりを求めたために、もうひとつの世界へと旅立って行った。ジョバンニはみんなの幸福を追い求めるがゆえにこの世界へと戻ってくる。カムパネルラはジョバンニの分身であった。誰もがジョバンニの側面と、カムパネルラの側面とをあわせ持っている。この世界に戻ってきたジョバンニは、しかしながら何がみんなの幸福であるのかを知らない。何がみんなの幸福なのか、どうすればそれが達成されるのか、ジョバンニはこの世界の中で模索しなければならない。銀河鉄道はその答えを与えてはくれなかった。鉄道が旅をした乳の海もまた、その答えを与えてくれなかった。その答えは、夢の鉄道の内部ではなく、この現実の世界の中で独力で見つけなければならない。

銀河鉄道がジョバンニに与えたもの、乳の海がジョバンニに与えたもの、それはみんなの幸福とは何かという「問い」であり、みんなの幸福を追い求めて生きてゆくエネルギーである。銀河鉄道の切符にはこの願いがこめられている。そして地上に戻ったとき、ジョバンニのこのひらには、その切符のかわりに、おっかさんのための牛乳がかたく握りしめられている。

この世界があつて、それを背後から支えるもうひとつの世界があつて、その二つの世界の間を道徳性の鉄道が循環する。この私がいて、もうひとりの私がいて、もうひとりの私は救済を求めてもうひとつの世界へと旅立って行き、この私はみんなの幸福のための自己犠牲のエネルギーをもうひとつの世界から与えられて、この世界へと戻ってくる。

母は常に包み込み目を閉ざさせるとはかぎらない。母は自らの乳を与えて息子を訓練へと旅立たせる構造を持っている、と信じることにしよう。母とは求心性をのみ持った一枚岩のブラックホールなのではなく、あるときは与えあるときは病み、母以外のみんなへと原理的に開かれてい存在であると認めることにしよう。たとえばこの世界ともうひとつの世界とが、母の多重性によって構造化されているとしても、その構造が多重であるというまさにその点において、母の一枚岩性は破れているのだと考えることにしよう。

## 世界の終り

村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、タルコフスキーのソラリスの第二の解釈を、壮大な規模にまで拡張させる。そしてこの世界の奥底に沈むもうひとつの世界の中で、救済が、静かに語られる。

この世界に住む「私」の深層記憶の内部に、私の表層意識には全く上ってこないもうひとつの世界が（脳手術によって）構築される。もうひとつの世界の中には、もうひとりの私である「僕」が出現する。

この世界に「私」がいて、その私の脳の奥底にもうひとつの世界がひそかに存在し、そのもうひとつの世界の中に「僕」がいる。

ソラリスの海が、島の上に、森や川や家にかこまれて住む「私」そのものを作り出したのと同様に、「私」は、私の深層記憶の中に、壁に囲まれた神話的な小宇宙と、そこに住む「僕」を作り出す。

僕の住むもうひとつの世界は、高い壁に囲まれた静かな街である。そこには、少数の人々と、一角獣が住んでいる。そこは「世界の終り」と呼ばれる。その世界は「安らかな」世界である。そこでは年をとることもなく、死ぬこともない。そこでは永遠の生が達成されている。

そこでは、「誰も傷つかないし、誰も傷つけない。誰も追い越さ

ないし、誰にも追い抜かれない。勝利もなく、敗北もない。」「嘆くものもないし、悩むものもない……年老いることもなく、死の予感に怯えることもない。」その世界は、永遠の調和と安らぎとを僕に保証してくれる。そこでは、世界の調和と安らぎを乱すような新たな事態は何ひとつ起こらない。安らぎに満ちた日々の生活の繰り返しが、その世界のすべてである。日々の営みを永遠に繰り返すことによって、人々は世界の調和を噛みしめ、自らの安らぎを完璧に味わうことができる。

「世界の終り」では、人々は自らの「心」とひきかえに、永遠の安らぎを手に入れる。

僕がこの世界にやってきたとき、門番は地面に貼りついている僕の影をナイフで切り剝がした。影は僕から離されて、牢に入れられる。影は心の象徴である。人々は影を奪われて、しだいに心を失ってゆく。

心は、互いに矛盾した様々な要因を内包している。一方で絶望や幻滅や哀しみがあり、一方で喜びや至福や愛情がある。これらのダイナミズムによって、心は心として成立する。人が真の、そして永遠の安らぎを得るためには、人は絶望や幻滅や哀しみとともに、喜びや至福や愛情をも捨てなければならない。絶望もないかわりに、喜びもない生。

熱くもなく冷たくもない湯が人の身体をなごませるように、絶望

も喜びもない生こそが、人に永遠の安らぎを約束する。

心とその働きを捨てれば、人はこのような永遠の安らぎを獲得することができる。「心が消えてしまえば喪失感もないし、失望もない。行き場所のない愛もなくなる。生活だけが残る。静かでひそやかな生活だけが残る。」「心を捨てれば安らぎがやってくる。これまでに君が味わったことのないほどの深い安らぎだ。」僕が住む「世界の終り」は、このような一種の悟りの生活を営むためのシステムに満ちている。壁も、一角獣も、僕の安らぎに奉仕する一機構にすぎない。

永遠の安らぎは、永遠の生、不死の中でのみ達成される。

「世界の終り」とは、この不死の要請が実体化した架空世界である。

博士の述べる「百科事典棒」のアナロジーを見てみよう。膨大な百科事典の全情報を1cmの棒に刻み込むには、その文字情報をすべて数字になおして頭から順番にならべ、その先頭に小数点を付け加えて、無限に長く続く小数を作り出す。そしてその棒を数直線に見立てて、その小数が対応する一箇所に印をつける。これで、一本の棒に、百科事典の全情報が記録されたことになる。

この机上の空論のミソは、ほとんど無限に続くはずの数列の運動が、巨視的には、不動の一点へと収斂してゆくところにある。すなわち、時間的には無限に展開されてゆくある運動が、それと対応する別の世界では逆に、ある一点へと静的に収斂してしまうというバ

ラドックス。

これを反対側から見よう。

ある一点へと静的に収斂してゆく不可避的な運動とは、死である。私は、動かしがたい私の死という一点へと、生を収斂させている。しかし、この私の生の運動と一对一の対応をもった、もうひとつの世界の中では、私の死へと向かうこの運動が、時間的に無限に展開されてゆく他の運動へと変換されている可能性がある。

私の住むこの世界と、僕の住むもうひとつの世界の関係は、このような変換が保たれているパラレルワールドとして設定されている。

「私」の死によって、この世界での物語は終わる。しかし、この世界における「私」の死とは無関係に、もうひとつの世界の僕は生き続ける。この世界で私が死んで、私の脳が破壊されたと同時に、その脳に組み込まれていたもうひとつの世界もまた消滅してしまうはずなのに、時間の無限展開の機能のおかげで、この世界で私が死ぬその一瞬の間に、もうひとつの世界は無限に終末を先送りする。

「人間は時間を拡大して不死に至るのではなく、時間を分解して不死に至るのだ」という博士のことは、このようなふうにして噛みしめるべきである。

時間を無限展開して成立する世界は、逆説的に、真の意味での時間性が徹底して排除される世界でもある。真の意味での時間性とは、次の瞬間に、過去からの歴史の累積からは決して完全には導かれな



いある新たな出来事が、世界の中に否応なく生起してしまうことだ。そしてそれが、世界が時間的に開いているということの意味である。

ところが、極小時間を無限展開してできる世界では、時間の流れはきわめて均質なものとならざるを得ない。そしてその均質性は、新たな事象が生起するという意味での時間性を、徹底して排除してゆくであろう。無限展開されてできた均質な時間の流れ。その流れに身をゆだねることで、喜びも哀しみもない日々の生活が約束され、そこで永遠の安らぎが達成される。

「僕」の住むもうひとつの世界は、「私」の深層記憶の中に作られる。この意味で、「僕」の住むその世界そのものが、実は「私」という存在者の一部である。僕は言う。「ここにあるすべてのものが僕自身であるように感じられた。壁も門も獣も森も川も風穴もたまりも、すべてが僕自身なのだ。彼らはみんな僕の体の中にいた。この長い冬さえ、おそらくは僕自身なのだ。」「ここは僕自身の世界なんだ。壁は僕自身を囲む壁で、川は僕自身の中を流れる川で、煙は僕自身を焼く煙なんだ。」

私がいる。その私を包み込んで世界がある。しかしその世界そのものが、実は私と同一である。「世界の終り」はこのような構造をもっている。私を包む世界と、世界に包まれる私との同一性。あるいは限定された小さな私と、世界そのものである大きな私との同一性。

このような同一性に支えられてはじめて、私は永遠の生と安らぎを獲得する。私が私を包み込むことによって、私は安らかに眠ることが出来る。雪の降る寒い夜に、私は私という綿の衣にくるまって、安らかな生へと自閉する。

村上春樹が創作したのは、私が心を失い、自分自身に包み込まれることによって救済される物語である。

僕から切り離された「影」は、僕を口説いて、一緒に壁の外へ脱出しようとする。僕は影と共に、街はずれの水の「たまり」まで行く。影は言う。「俺には感じる事ができるんだよ。このたまりの向うには外の世界があるっていうことをね。」

しかし僕は、この世界に残ることを決意する。影はひとりで、たまりの中に飛び込み、消えてゆく。

僕と影とは分身である。影は、この世界の自己同一性と自閉とを嫌い、その外にあるはずの、心に満ちた世界へ戻ることを希求する。これに対して、僕は、この僕自身でもある世界の中に残って、その中で永遠の生を送ることを選ぶ。

もうひとつの世界の中に、私と、もうひとりの私がいて、もうひとりの私は外の世界へと旅立って行き、私はひとりこの世界に残される。確かに、僕は、娘やいく人かの人々の心を解放させるためにこの世界に残ったのかもしれない。しかしそれらの行為は、大きく迂回して、世界そのものである僕自身へと帰着するはずである。

これは、銀河鉄道の夜の世界を、カムパネルラの側から描いたものと言えるかもしれない。しかし、ジョバンニのもっていた牛乳ははるかに拡散し、牛乳を待つ母の姿もかすれ、みんなの幸福を願うその切なる思いも、この世界には遍在していない。僕が僕自身に包まれてあることの安らぎ。この作品が提示する魅惑的な宗教世界の核心は、この位置にある。

その世界観は、自足が他者の掌のなかでこそ可能であることを示したソラリスや、救済が他者に対する道徳性と相即不離であることを示した銀河鉄道の夜よりも、狭く、浅い。しかし、この作品は、その狭さ浅さのゆえにこそ、逆に純粹である。私が私の死にどのように直面し、それをどのように回避するかを、美しく描き尽くしたその一点において、この作品は珠のように純粹である。

#### ファンタジー

幼い頃、百科事典の「宇宙」の項を繰り返し読んでいた記憶がある。宇宙には、木星の軌道半径よりも大きな星がある。夜空に輝く恒星は、やがて巨星となり、自らの惑星たちを呑み込んでから突如収縮し、ブラックホールとなって星間物質や光などあらゆるものを自らの内部に吸い寄せて消滅させる。惑星に生命体はぐくんだ光あふれる恒星が、遠い未来には、すべてを呑み尽くし消滅させる宇宙の暗黒の墓場となる。

このイメージは、幼い私を感動させ、恐怖させた。(当時はまだ量子論的效果によるブラックホールの蒸発など知られていなかった。)

遠い宇宙の星たちが、墓場に呑み込まれて死んでしまう。

そのようなことを想像しているうちに、私の思考はやがてゆるやかに形を変え、ある観念を反芻していたように思う。

私が死んだら、どうなるのだろうか。

その時から今まで、この問いが一時も私の脳裏を離れたことはない。

私が死んだら、この世界も宇宙も、同時に完全消滅してしまうという考えに惹かれたこともある。だがいまはその考えを冷やかな想い出をもつてしか眺めることができない。

死んだらあの世へ行くと信じている人は多い。しかし、この世で死んだあと、あの世で生き続けるとすれば、私はやっぱりそこで「生きて」いることになる。あの世へ行くと、要するに、この世の死では「本当には死なない」ということだ。要するに死は存在しないということだ。こうやって死は回避されてゆく。

私はこういう形での死の回避を、どうしても自分自身の問題として引き受けることができない。

もうひとつの死の回避の仕方は、この世においてさえ、実は私の死は存在しないとする考え方である。私の生に始まりの点を特定で

きないように、私の生にその終わりの点を特定することもできない。私の生は常に「いま」の連続であり、従って、私の生に「終わり」というものは存在しない。私に死は訪れない。

このような形の死の回避を引き受けることのできる人々を、私は心底から、幸せだと思う。

私は、私の死から目をそらしたいにもかかわらず、決してそこから目をそらすことはできない。

私はやがて死ぬ。私が死んでも、私はあの世なんかにゃ行かない。私が死んだら、私にとってこの世の一切は終わる。私の意識が消滅し、私の記憶が消滅し、私の全感覚が消滅し、永遠に二度と立ち現われることはない。

あの世が存在しないというのもひとつの信仰である。

そして私はそれを信仰する。

その信仰は、私に、癒しがたい死の恐怖を植えつける。

どのような最期を迎えると思うかと、誰かに聞かれたときには、正直に答えることにしている。私が死ぬとき、私は「まだ死にたくない」と呻きつつ、あるいは「死ぬのはいやだ」と叫びつつ、無残に死んでゆくだろう。それは惨めな最期だろう。

この信仰は、私の死の間際に救済をもたらすことはない。この信仰は、死の恐怖に打ち震える私を、冷酷に鞭打つ。あの世はない。あるのは、いま、ここで終焉しようとしている、この生だけである。

私は、いまここに縛りつけられて生きる。いまここに縛りつけられた私の死に、救済はない。私は誰によっても、何によっても救済されることなく、この世で消滅し無に帰してゆく。いくら叫んでも、いくら拜んでも、誰も助けに来てくれない。私はひとりで死んでゆく。死の恐怖から最後まで癒されずに、自分の死のことを頭から追い払おうと努力しつつ、なおすがるように誰かの名前をかすれ声で呼んでみたりする。

そうやって私は死んでゆく。あの世の存在、この世での不死を信じることでできない者にとって、私の死とは孤独で耐えがたい不条理の出来事である。私は私の死を前にして、手足がすくみ、身がすくみ、背ざめた口もとからはことばひとつ正確には発せられないだろう。私はそのような私の死に、いずれ直面するに違いない。そしてまったく身動きがとれずに、絶望の底へと突き落とされるに違いない。死に直面した私に救済はない。死に直面した私に、もうひとつの世界、もうひとりの私は存在しない。

しかしそのかわりに、私はいまここで、想像力の限りを尽くして「いま・ここ」の鎖を解き放ち、縦横無尽にあらゆる世界を飛翔するのだ。想像力のエンジンを全開にして、他者の表現世界のなかで身をくねらせて交歓し、あるいは自らファンタジーをつむぎだして、その架空世界の中で問いを発し、解答を求めて邁進する。

死によってすべてを奪い取られる前に、私は想像力の翼によって、

いまここで、宇宙の果てまで駆け上がる。私はもうひとりの私となり、世界は様々な世界となって展開する。私は、いくつもの生を生き、いくつもの世界を体験し、いくつもの思考を思索する。

こうやって私は、ファンタジーの架空世界の中において、いまここで癒されているのである。

#### 補注

『銀河鉄道の夜』には初期形、最終形をも含め、四種類の原稿がある。ここでは最終形とともに、初期形第三次稿をも参照した。従って、最終形では削除されている部分についても同等に考慮した。

『銀河鉄道の夜』研究の概要は、『賢治童話事典』佐藤泰正編『宮沢賢治必携』学燈社（一九八一）、佐藤泰正『銀河鉄道の夜』諸説集成『国文学』三二巻六号、学燈社（一九八六）などで得られる。それら研究文献の中から、ここで関連すると思われるいくつかの議論を紹介する。

ジョバンニとカムパネルラが、オルフェとユリディスの関係に似ているという点はつとに指摘されてきた。福島章は、『宮沢賢治』金剛出版（一九七〇）の中で、この二人の関係を、賢治の妹に対する『近親相愛的感情』になぞらえている。別役実は、『ジョバンニとカムパネルラ』『宮沢賢治』第七号（一九八七）の中で、ジョバンニの中の「カムパネルラ・コンプレックス」とカムパネルラの中の「ジョバンニ・コンプレックス」を指摘する。松田司郎は、『分離』と『合一』のバターン『宮沢賢治』第七号の中で、この二人の希求したものを「全き合一」とあるととらえている。この二人の関係を、互いの

合一を求めるある種の分身の関係としてとらえる考え方は多いようである。

別役は同論文で、『母親のための牛乳を取りにゆくという口実』を持ったジョバンニは、『牛乳屋に担当者がいなかったことで、『牛乳を取りにゆく』という口実からも、彼は切り離されてしまう』というふうに、『牛乳』を単なる「口実」としてとらえている。これに対して原子郎と伊藤真一郎は、『共同討議・賢治童話を読む』『国文学』三二巻六号の中で、次のように言う。「原……そうすると彼『ジョバンニ』は銀河を食っちゃったんだ。夢、幻想を食っちゃった。（笑）言えなれば。伊藤……ああ、はい。冒頭の先生の授業にもあるように、銀河は天の牛乳で、ジョバンニは牛乳を手に入れて帰るわけだから、確かに、銀河を食っちゃったと言っているのかもしれないね。」牛乳と、銀河（milky way）と、母との関係は、もっと深く追求されてよいと思う。

吉本隆明は『宮沢賢治』筑摩書房（一九八九）の中で、『母』が、『病気であったり『死』のあとの世界で求められる像になっている』と述べる。そしてそのような『死』によって隔てられたなつかしさが『母』たちのもつ吸引力であると言う。天沢退二郎は、『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』（入沢康夫と共著）青土社（一九七六）の中で、カムパネルラが銀河の彼方に見つける母を、『前生のお母さん』『生まれる前の根源的な母』であると述べている。確かに、『銀河鉄道の夜』の中で、母が死と密接に関連しているのは事実である。しかし、私はそれ以上に、この世界ともうひとつの世界とを媒介する『構造』としての母、という側面が存在するのではないかと考えたい。村瀬学は、『銀河鉄道の夜』とは何か』大和書房（一九八九）の中

で、この物語の持つ「文学としての力」を、『ピーターパン』や『星の王子さま』などと比較検討している。その文学的力は、この世界ともうひとつの世界とのあいだの往還を、ファンタジーとして見事に形象化している点にある。この往還の構造を一般化する試みも今後の課題であろう。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』についての批評は、村上龍他『シート&ファインド 村上春樹』青銅社（一九八六）、『ユリイカ・総特集 村上春樹の世界』（一九八九・六臨時増刊）などに取められているが、見るべきものはほとんどない。最も参考になるのは、『文学界』（一九八五・八）の村上春樹自身による解説「物語」のための冒険」であろう。これを読むと、作品の構成に関して村上がいかに自覚的であったかが分かる。村上春樹研究は、いまだまともにはなされていないようである。

#### テキスト

- スタニスワフ・レム『ソラリスの陽のもとに』早川書房 一九七七  
『宮沢賢治全集7』ちくま文庫 一九八五  
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社 一九八五